

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

5. 広報・社会連携

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009676

概観

高校生の観覧料無料化

次世代を担う高校生の文化人類学・民族学への興味を深める機会を拡大し、国際理解教育の充実に貢献するために、2019年6月6日から高校生の観覧料を無料とした。年度途中からの実施ではあったが、高校生の団体見学件数は前年度から25%程度増加した。

地域に根ざした広報活動

2015年に開業した大型複合施設エキスポシティ内にある吹田市情報発信プラザ「Inforest すいた」で1カ月間（9月2日～9月30日）、「みんぱくフェア」を開催した。標本資料を利用した顔出しパネルを設置するなど、研究・展示活動を発信し、本館の認知度向上と集客を図った（入場者数25,947名）。

北大阪8市3町の美術館・博物館計57館が参加する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に会場を提供するとともに、本館のブースを出した。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2019に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、注目度を増した千里を起点として発信する広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

本館研究者の研究成果を幅広い層に社会還元するため、積極的なアウトリーチの講演活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪・梅田のグランフロント大阪で、一般社団法人ナレッジキャピタルと連携して「みんぱく×ナレッジキャピタル 想像界の奥へ」を開催し、3講座を実施した。今年度は、第1回目の講座を公開座談会（2019年9月23日）としてグランフロント大阪のナレッジシアターにおいて開催し、313名の参加があった。また第2回目はグランフロント大阪のカフェ・ラボにて対談を行い（10月8日、参加者54名）、第3回目は展示場ツアー（10月20日、参加者30名）とすることで、館外での催しを展示観覧につなげることを企画した。

さらに、本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズの作品を広報、普及するため、大阪市内にあるミニシアター「淀川文化創造館シアターセブン」において上映するとともに、監修者による解説を行った。4回の実施で延べ166人の参加があり、当館への来館経験がない層に対し当館の活動を広報することができた。

千里文化財団の協力のもと、大学等教育機関との連携を図り、文化人類学・民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続実施し、高等教育への本館の活用を促した。今年度は、新規加入1校（同志社大学グローバル地域文化学部）、継続加入8校（大阪大学、学校法人京都文教学園（京都文教大学・短期大学）、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学、学校法人立命館（立命館大学）、学校法人塚本学院（大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校）、京都大学、京都市立芸術大学）の申込があり、計3,985名の学生、教職員が来館した。また、本館の展示や館蔵資料を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんぱく活用」を本館ウェブサイトに掲載するとともに、活用方法を紹介したリーフレットを作成し、全国の大学に配布した。今年度は、本館を利用した大学教員による講義・講習が113件実施され、3,215名の学生等に展示場が利用された。

初等中等教育への貢献として、大阪北摂地域の中学校6校から15名を職場体験として受け入れたほか、学校教員を対象に、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツール、貸出用学習キットなどの紹介を目的としたガイダンスを春と秋の遠足シーズン前に2回実施し、80団体243名の参加があった。

また、小学校団体の博物館見学を有意義で楽しいものにし、体験を通じて多文化共生を学ぶきっかけをつくることを目的とした、展示場における体験プログラム「わくわく体験 in みんぱく」（参加団体16件、参加人数1,292名）を提供した。さらに、夏休み期間中に小学4年生～6年生を対象に、本館展示場内でフィールドワークを体験するワークショップ「フィールドワークに挑戦！極寒！——40℃のくらし」を実施（12名参加）したほか、科学研究費補助金研究成果公開促進費の支援を受け、「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の事業として小学5、6年生を対象に、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連ワークショップ「ゴミから生まれる異音獣！」を実施した。本ワークショップにおいては、立体コピーや3Dプリンタで作成した触察資料を用いることで、視覚障害児童が共に学んで楽しめるユニバーサルな形態で実施した。

その他、若い世代に対する特別展と本館展示の相互観覧による理解度の向上を目的に学校団体（大学）に対する特別展観覧料の優待措置を継続した。

インターネットによる広報活動

ウェブサイト上のニュースや、催し物のコンテンツで最新の情報を発信したほか、特別展や企画展は個別サイトを作成し関連イベントを中心とした情報発信を行った。ホームページの利用者数は、訪問者数1,215,040、ページビュー数3,704,553であった。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信した（配信数は53,892件）。

ソーシャルメディアに関しては、利用者も順調に増加し、自前の広報メディアとして、着実に地歩を固めている。（Facebook いいね！数15,949（累計）、Twitter フォロワー数47,697（累計）、YouTube 総再生回数32,530（年度）、Instagram いいね！数3,340（累計））。

マスメディアによる広報活動

新聞に関しては、毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」の連載を継続し、本館の研究者がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。また、文部科学教育通信で月2回「国立民族学博物館の収蔵品」を連載し、本館研究者が研究内容と本館収蔵資料について解説した（2019年8月26日終了）。さらに、週刊新潮でコラムニストがみんぱくの収蔵品を紹介する、「ディープ『みんぱく』探検隊」の連載が開始された（2019年12月～）。千里ニュータウンFM放送番組「ごきげん千里837（やあ、みんな）」も継続している。

プレスリリースも随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間30本）。報道関係者との懇談会・内覧会等は、年11回（参加者数167名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。2019年度は、テレビ63件、ラジオ60件、新聞583件、雑誌129件、ミニコミ誌123件、その他356件の各媒体総数1,314件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して文化人類学・民族学の最新の研究成果を発信する「みんぱくゼミナール」を11回（参加者数2,125名）、研究部のスタッフと来館者が展示場内でより身近に語り合う「みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう」を29回実施した（参加者数1,287名）。みんぱくゼミナールにおいては生涯学習の促進のために10回参加毎に表彰を行っており、今年度は104名を表彰した。

また、映画の上映に研究者の解説を加えた「みんぱく映画会」を8回（参加者数1,270名）開催した。特に今年度は、当館がこれまで継続してきた「被災地における無形の文化遺産の支援活動」の一環として、東日本大震災により甚大な被害を受けた岩手県三陸海岸を舞台に、大津波を生き抜いた神楽と、この地に暮らす人びとの生活のベースにある力強さを描いたドキュメンタリー映画「廻り神楽」の上映とトークセッションを行った。

この他、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連として、研究公演「能と怪異（あやかし）」（2019年9月29日・参加者数638名）や企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」関連として研究公演「ソン・ハローチョ——国境を越えるメキシコの歌」（2019年10月27日・参加者数384名）を開催した。研究公演「ソン・ハローチョ」の前日には、メキシコでソン・ハローチョが成立した歴史や演奏の際に使用する楽器について学ぶことを目的としたワークショップ「ソン・ハローチョを楽しもう」をセミナー室にて開催（参加者数33名）した。

今年度で17回目の実施となる「音楽の祭日2019 in みんぱく」（参加者数のべ5,891名）、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的として行う祈りの儀式「カムイノミ儀礼」（見学者数266名）を実施した。カムイノミ儀礼において、今年度は、参加者の安全面を配慮し、儀式の同時中継を当館エントランスホールで行ったところ、小さな子ども連れの参加者や保育園児が中継にて参加した。

さらに、特別展・企画展・展示イベントに関連するワークショップ、ゼミナール、ウィークエンド・サロンなど、多数のイベントを開催し、展示の理解を深めることに寄与した。

これらの活動は、みんぱくカレンダーやチラシを制作し、関係諸施設を通じて配布したほか、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友会の会会員に配付するとともに、全国の研究機関、大学等に寄贈することによって、広く情報発信を行った。視覚障害者向けの同誌音訳版も並行して製作・配付した。

その他の活動

学校を卒業した知的障害者に対し、博物館を開かれた学びの場として提供するため「みんぱく Sama-Sama 塾」の試行を昨年度に引き続き行った。今年度はワークショップを6回実施し、延べ207名の参加があった。ワークショップ当日の様子やアンケート結果を元に知的障害者が博物館を活用する際に必要とされることや改善点などを探った。

また、高齢者や身体が不自由な方等多くの方が快適に来館できるよう、特別展会期中の土、日、祝日に大阪モノ

レール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。

国立民族学博物館要覧2019

- 和文要覧 2019年7月発行
- 英文要覧 2020年2月発行

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/> (2020年3月31日現在)

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2019年度の訪問件数は1,215,040件。

• 研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

• 博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

• 大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

• データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2019年度の配信数は53,892部。

報道

● 報道関係者との懇談会

- | | | |
|------------|----------|--|
| 2019年4月18日 | 16名(11社) | 観覧料の改定について、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」、みんぱく映画会「サーミの血」(第45回みんぱくワールドシネマ)、最新の研究紹介 |
| 5月16日 | 15名(10社) | 焼畑データベース公開について、DiPLAS プロジェクトについて、最新の研究紹介(刊行物紹介)、音楽の祭日2019 in みんぱく |
| 6月20日 | 14名(7社) | 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」、夏やすみみんぱくワークショップ、最新の研究紹介(刊行物紹介)、研究の窓(民博の台湾資料——フォーラム型情報ミュージアムによって引き出される新たな価値、『プレクジット』にみる民主主義とメディア)、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」(展示ツアー) |
| 7月18日 | 11名(10社) | 主催事業 ICOM 京都大会、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連催し、最新の研究紹介(刊行物紹介)、研究の窓(亜熱帯・温帯ポリネシアにおける熱帯作物の生産のはじまり)、「ストリートの精霊たち」第6回鉄犬ヘテロトピア文学賞 受賞について |
| 8月28日 | 26名(20社) | 特別展「驚異と怪異」報道・出版関係者向け内覧会 |

9月19日	15名（10社）	企画展「アルテ・ポップラー——メキシコの造形表現のいま」、みんなく映画会「ワンドーストラック」（第46回みんなくワールドシネマ）、一般公演シンポジウム「グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント」、公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題 2020オリパラを迎える前に」、公開講演会「サブカルチャー遺産の現在「アニメ『聖地』巡礼」、国立民族学博物館コレクション「世界のかわいい衣装」
10月17日	15名（11社）	トーテムボールの制作に向けて、ミンパク オッタ カムイノミ（みんなくでのカムイノミ）・アイヌ工芸 in みんなく、みんなく映画会「あまねき旋律（しらべ）」（第47回みんなくワールドシネマ）、最新の研究紹介（刊行物紹介）、研究の窓（応援の比較文化論）、企画展「アルテ・ポップラー——メキシコの造形表現のいま」（展示ツアー）
11月28日	15名（10社）	コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」、トーテムボール制作——最新報告、みんなく年末ワークショップ「みんなく村に神楽がやって来る！——伊勢大神楽実演とおはなし」、最新の研究紹介（刊行物紹介）、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」報告
12月19日	14名（12社）	公開講演会「ふたつの文化を生きる——ドイツのトルコ系移民から私たちのこれからを考える」、みんなく映画会「廻り神楽」、みんなく映画会／みんなく映像民族誌シアターについて、最新の研究紹介（刊行物紹介）、研究の窓（第9回地域研究コンソーシアム賞の受賞と研究報告）
2020年1月16日	10名（7社）	特別展「先住民の宝」、特別展「先住民の宝」関連イベント（ワークショップ「ボードゲームで学ぶ・考える 北極域の環境変化と人」、研究公演「絆——人をつなぐ太鼓」、研究の窓（カワウを同時に孵化させる技術）コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」（展示ツアー）
2月20日	16名（12社）	梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」、特別展「先住民の宝」アイヌ（日本）、国際シンポジウム「Performing Arts and Conviviality」、研究の窓（海のサピエンス史）

●新聞等報道件数

2019年度は、テレビ63件、ラジオ60件、新聞583件、雑誌129件、ミニコミ123件、他356件、計1,314件の報道があった。

月刊みんなく

4月号（第499号）	2019年4月1日発行	特集「みんなくの収蔵庫」
5月号（第500号）	2019年5月1日発行	特集「月刊みんなく500号のあゆみ」
6月号（第501号）	2019年6月1日発行	特集「サウジアラビア、女性の暮らしの半世紀」
7月号（第502号）	2019年7月1日発行	特集「バスケットリー」
8月号（第503号）	2019年8月1日発行	特集「驚異と怪異——想像界の生きものたち」
9月号（第504号）	2019年9月1日発行	特集「奴隷展示は問う」
10月号（第505号）	2019年10月1日発行	特集「メキシコのアルテ・ポップラー」
11月号（第506号）	2019年11月1日発行	特集「ラグビーという文化」
12月号（第507号）	2019年12月1日発行	特集「先住民の言語」
1月号（第508号）	2020年1月1日発行	特集「世界の縁起モノ」
2月号（第509号）	2020年2月1日発行	特集「朝枝利男とガラパゴス」
3月号（第600号）	2020年3月1日発行	特集「先住民とアート」

みんなくゼミナール

第490回 教育玩具とその時代——子ども・おもちゃ・教育

【特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連】

2019年4月20日

講 師 是澤博昭（大妻女子大学 教授）
笹原亮二

受講者 163名

内 容 近代教育の対象として、幼児を含む子ども全体を意識し始める過程を玩具から振り返った。

第491回 文化遺産の持続的な活用をめざして——南米ペルー北高地パコパンバ遺跡での試み

2019年5月18日

講 師 關 雄二

受講者 164名

内 容 南米アンデス文明の神殿遺跡パコパンバの調査において、住民とともに実施している文化遺産の持続的活用を目指す活動を紹介した。

第492回 物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀

【企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」関連】

2019年6月15日

講 師 西尾哲夫

縄田浩志（国立民族学博物館 特別客員教授）
遠藤 仁（現代中東地域研究・秋田大学拠点研究員）

受講者 161名

内 容 アラビア半島でおよそ半世紀前に撮影された写真と人文地理学的・文化人類学的記述をてがかりに、物質文化の特質と生活世界の持続と変容について考えた。

第493回 アンデスの褐色のキリスト——奉納品をとおしてみる信仰の世界

2019年7月20日

講 師 八木百合子

受講者 165名

内 容 アンデス高地のクスコの町に祀られる褐色のキリスト像など、人びとが寄進した奉納品に描かれたイメージを紐解きながら、信仰の世界を読み解いた。

第494回 文化人類学者・片倉もとの見たサウジアラビア

【企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」関連】

2019年8月17日

講 師 菅瀬晶子

片倉邦雄（片倉もとこ記念沙漠文化財団評議員会議長、元駐 UAE・駐イラク・駐エジプト大使）
藤本悠子（片倉もとこ記念沙漠文化財団事務局主事）

受講者 258名

内 容 片倉もとこがサウジアラビアで撮影した写真や収集した民具などの調査資料を活かしつつ、半世紀後に実施した最新の現地調査成果を紹介した。

第495回 奴隷交易の世界史——サハラ以南アフリカと世界

2019年9月21日

講 師 鈴木英明

受講者 200名

内 容 サハラ以南アフリカから輸出された奴隷交易に注目し、世界史的な観点からこの交易の実態を考えた。

第496回 珍獣・霊獣・幻獣・怪獣——人はなぜモンスターを想像するのか？

【特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連】

2019年10月19日

講 師 山中由里子

受講者 274名

内容 世界各地の人びとが創りだしてきた想像界の生物多様性を探求するとともに、人類に普遍的な心の動きやイメージのつくられ方について考えた。

第497回 ルーマニア近代の知識人と民衆——民族主義、正教信仰、社会主義のなかで

2019年11月16日

講師 新免光比呂

受講者 166名

内容 西欧化した知識人と前近代的な農民社会を特徴とする20世紀ルーマニアの激動の時代を振り返った。

第498回 海の人類史——東南アジア・オセアニア考古学の最前線

2019年12月21日

講師 小野林太郎

受講者 190名

内容 東南アジアやオセアニアの島々を舞台に、私たち人類の海洋適応や渡海について、最新の考古学成果を交え、紹介した。

第499回 イタリアにおける人と食のかかわり

2020年1月18日

講師 宇田川妙子

受講者 182名

内容 自分たちの食に高い関心とプライドを持ち、食に関する活動も活発なイタリアにおける食の現状を、さまざまな角度から紹介した。

第500回 文明の転換点におけるミュージアム——みんぱくのこれまでとこれから

2020年2月15日

講師 吉田憲司

受講者 202名

内容 人類学と博物館そしてみんぱくが、今どのような地点に立ち、これからどのような方向へ向かおうとしているのかをお話した。

第501回 南半球の華僑華人——客家を中心として

2020年3月21日（新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時休館のため中止）

講師 河合洋尚

受講者 ——

内容 21世紀に突入後、南半球では華僑の移住が急増している。そのうち客家が多いタヒチ、ニューカレドニア、バレーをとりあげ、中国系新移民の流入による華人社会の変化を解説する。

みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

第538回 2019年4月7日 南アジアの弦楽器

講師 寺田吉孝

受講者 46名

内容 南アジアは弦楽器の宝庫であるが、その多くが西アジアや中央アジアから伝えられた外来の楽器に改良が加えられ定着したものである。人間とともに移動してきた楽器の「旅」を紹介する企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」の見所と楽しみ方を紹介した。

第539回 2019年4月14日 戦後のおもちゃ

講師 日高真吾

受講者 31名

内 容 戦後のおもちゃは、敗戦後から、高度経済成長にかけて大きく変化した社会情勢に呼応するようにさまざまな形で展開していった。ウィークエンド・サロンでは、戦後日本の社会の変化とおもちゃの変遷について解説した。

第540回 2019年 4 月21日 認知革命とビーズ

講 師 池谷和信

受講者 23名

内 容 4月9日から6月16日まで、みんぱくと科博（国立科学博物館）との合同企画『ビーズ』展が科博で開催された。ここでは、人類にとってビーズとは何かを、科博での展示とのかかわりから追求した。ビーズは、人類の最古のアートといわれる。言語、ダンス、絵画、神話などとビーズを比較して、ビーズの文化的特徴について考えた。

第541回 2019年 4 月28日 どうして言葉は変わるのか

講 師 吉岡 乾

受講者 64名

内 容 日々私たちが使っている言語は、日々変化している。親やその親、子やその子、歳の離れた人たちの言葉と自分のとを改めて比べてみると、違うことがわかる。それは言葉が変わるからである。では、どうして言葉は変わるのか、考察した。

第542回 2019年 5 月12日 新ビデオテーク紹介「ただいまオンエア——ソニンケ・ディアスポラをつなぐ地域ラジオ」

講 師 三島禎子

受講者 18名

内 容 地域ラジオの活動をととして、文化の力で地域の発展を試みるソニンケ民族の取り組みについて、映像を交えて話した。新しいビデオテークと映像民族誌DVDを先取りして紹介した。

第543回 2019年 5 月19日 アーミッシュキルトの誕生——米国のエスニックグループの交流史から

講 師 鈴木七美

受講者 14名

内 容 アーミッシュキルトは、ヨーロッパからの宗教移民であるアーミッシュが、19世紀後期に、米国で作り始めたものとされている。アーミッシュたちはどのようにしてキルトと出会ったのか。キルトづくりをさまざまなエスニックグループの交流史から考えた。

第544回 2019年 5 月26日 アンデスの悪魔の踊り

講 師 八木百合子

受講者 47名

内 容 アンデス高地の祭りでは、ディアブラダと呼ばれる奇抜な仮面と鮮やかな衣装をまとった悪魔たちが大行進を繰り広げる。スペインの植民地化以降に始まったこの悪魔の踊りの起源や現在の悪魔たちの姿について紹介した。

第545回 2019年 6 月 9 日 「みられる私」から「みる私」への変身——ベールの内からみる世界へ

講 師 西尾哲夫・縄田浩志

受講者 50名

内 容 本館名誉教授の片倉もとこが半世紀前にサウジアラビアで収集した民族資料や民族誌写真を、現在の現地の人びとといっしょに読み解くことで、そのあいだに起こった環境や社会の変化のなかで女性たちの暮らしがどのように変わってきたかについて考えた。

第546回 2019年 6 月30日 中国文化の中の「動物」たち

講 師 韓 敏

受講者 39名

内 容 羊、馬、豚、鳥、魚、獅子のような動物、あるいは竜や麒麟のような想像上の生き物は、長い間人類と共存してきた。かれらがわれわれの暮らしのパートナー、また、人生観や宇宙観を表すメタファーとして、人間社会にどのようにかかわってきたのかを考えた。

第547回 2019年7月14日 「サウジ版江南スタイル」にみるハラールな若者文化

講 師 相島葉月

受講者 47名

内 容 韓国人ラッパー PSY が2012年に発表した「江南スタイル」。ソウルの富裕層を風刺した歌詞とダンスは世界中の若者を虜にし、パロディ版が次々と YouTube にアップロードされた。女性が登場しない「サウジ版江南スタイル」から、サウジアラビアの若者文化について考えた。

第548回 2019年7月21日 ジャワ島のガムランのリズム

講 師 福岡正太

受講者 45名

内 容 比較的単純なリズムを組み合わせる1つのリズムをつくるのが東南アジア音楽の特徴の1つである。インドネシア、ジャワ島のガムランのリズムを体験するコーナーで、大小いくつかのゴングを実際にならしながら、一緒にリズムを体験した。

第549回 2019年7月28日 バザールの風景——ウズベキスタンの市場事情

講 師 寺村裕史

受講者 38名

内 容 バザール（市場）は、たくさんの人やモノ、そして情報が集まる場所である。バザールのあちこちで、値段交渉や情報交換のための大きな話し声が飛び交っている。そうしたバザール独特のにぎわいや喧騒を、ウズベキスタンの映像をまじえながら紹介した。

第550回 2019年8月4日 南太平洋・ヴァヌアツの華僑華人

講 師 河合洋尚

受講者 19名

内 容 ヴァヌアツは現在、オセアニア島嶼部で最も中国系人口が増加している国であるといっても過言ではない。彼らが移住した社会・経済的背景、現在の生活、そして現地への影響関係について解説した。

第551回 2019年8月11日 ヒジャーズとパレスチナ、その歴史的なかかわり

講 師 菅瀬晶子

受講者 46名

内 容 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」で扱っている地域は、古来ヒジャーズ地方と呼ばれてきた。かつてヒジャーズ地方とパレスチナを結んだヒジャーズ鉄道の今日の姿を中心に、両地域の歴史的なかかわりについて話した。

第552回 2019年8月25日 えっ、何で博物館で会計の話？おかねの言語体系「会計」と人類学

講 師 出口正之

受講者 36名

内 容 博物館は人類の森羅万象にヒントを与えてくれる場である。インカ帝国の遺物から現代社会のグローバル企業、非営利法人の会計までを視野に入れて、「会計」が持つ不思議さを語った。

第553回 2019年9月1日 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」

講 師 山中由里子

受講者 113名

内 容 なぜ人類は、この世のキワにいるかもしれない不思議な生きものを思い描き形にしてきたのか。水に潜み、天に羽ばたき、地を巡る、世界の霊獣・幻獣・怪獣が一堂に会した特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」を案内した。

第554回 2019年9月8日 アオテアロア／ニュージーランドへの長い旅路——オセアニア大航海

講 師 ピーター J. マシウス

受講者 49名

内 容 高性能な帆走カヌーにより、人びとは太平洋を移動し、隔絶した島々で新たな共同体を築くため植物や動物を搬送した。近年の研究成果を紹介した。

第555回 2019年10月6日 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」を巡って

講 師 笹原亮二

受講者 94名

内 容 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の展示内容にちなんだ、日本の民俗文化にかかわる話題を紹介した。

第556回 2019年10月13日 ガンディーの携帯用手紡ぎ車

講 師 三尾 稔

受講者 30名

内 容 2019年10月2日は、インド独立の父マハトマ・ガンディーの生誕150年にあたる。みんなの展示資料からガンディーとゆかりの深い携帯用手紡ぎ車を取り上げ、その開発の経緯や彼が広めた手紡ぎ手織り布運動とインド独立運動のつながりについて話した。

第557回 2019年10月20日 インドにおける異形の神々

講 師 松尾瑞穂

受講者 97名

内 容 インドのヒンドゥー教の神々は、時に恐ろしく時に奇妙な異形の姿を示している。動物との合体像や多面多臂像、血を滴らせた恐ろしい女神像……。また、さまざまな動物も聖獣として信仰されてきた。これらの神々をとおして、インドにおける異形の具像表現を紹介した。

第558回 2019年11月3日 ラテンアメリカのアルテ・ポプラル

講 師 鈴木 紀

受講者 44名

内 容 企画展「アルテ・ポプラル——メキシコの造形表現のいま」ではメキシコの民衆的な造形表現を展示したが、アルテ・ポプラルは他のラテンアメリカ諸国にも見られる。ラテンアメリカのいくつかの博物館の展示を比較しながら、企画展の特徴を解説した。

第559回 2019年11月10日 「旧世界」の驚異——キリスト教宣教とアメリカ先住民

講 師 齋藤 晃

受講者 81名

内 容 15世紀末のアメリカの「発見」はヨーロッパ人には未知の世界を開示する驚異であった。しかし、先住民にとっても「旧世界」は驚異に他ならなかった。ヨーロッパ文化に接した先住民の驚嘆が、彼らのキリスト教改宗とどのように結びついていたかを説明した。

第560回 2019年12月1日 みんなの展示場の中の宗教

講 師 新免光比呂

受講者 41名

内 容 世界にはさまざまな宗教があり、儀礼や神話、彫像や画像などで多彩な表現をおこなっている。みんなの展示場の標本資料をとおして、その一端にふれた。

第561回 2019年12月8日 「健常者」幻想をぶっ壊せ！——琵琶法師、イタコの触角力

講 師 廣瀬浩二郎

受講者 36名

内 容 人間はいつから「触角＝動物的な勘」を失ってしまったのか。実は、今日もなお「動物的な勘」を保持

しているのが障害者である。琵琶法師やイタコなど、盲目の宗教・芸能者の歴史を振り返り、健常者が忘れている「触角」の潜在力を引き出す方法を探った。

第562回 2019年12月15日 サンタクロースとなまはげ——ヨーロッパの時間と季節の感覚

講師 宇田川妙子

受講者 47名

内容 クリスマスの前夜に子どもにプレゼントを持ってくるサンタクロースは、実は、日本のなまはげと似ている部分がある。キーワードは「来訪神」。季節や時間の節目に、異界から訪ねてくる神様の意味である。ヨーロッパの来訪神や関連する祭りを紹介しながら、彼らの季節感・時間観について考えた。

第563回 2020年1月12日 カワウの雛を同時に孵化させる技術

講師 卯田宗平

受講者 16名

内容 自然下のカワウは、親鳥が2-3日に1個のペースで産卵する。よって雛も抱卵期を過ぎると2-3日に1羽のペースで孵化する。ところが中国雲南省の漁師たちは、飼育下のカワウを同時に孵化させる。自然下ではみられない、カワウの同時孵化の技術を紹介した。

第564回 2020年1月19日 聖者になる過程——カザフのイスラームと近代

講師 藤本透子

受講者 36名

内容 病気の治癒や子授け祈願などのため、カザフスタンでは多くの人が聖者の墓廟（ほびょう）を訪れる。20世紀に成立した比較的新しい墓廟をとりあげ、ある人物が聖者とみなされていく過程をとらえて、イスラームと近代の関係を考えた。

第565回 2020年2月16日 バリ島トゥングナン歴100年分のカレンダーをつくる

講師 山本泰則

受講者 10名

内容 バリ島のトゥングナン村ではバリ歴とは異なる独自の暦を使っている。今回、かつてみんなくで作成したトゥングナン歴カレンダー作成プログラムを解説し、西暦2016年から100年分のカレンダーをつくった。ウィークエンド・サロンでは、そのときの苦労話を話した。

第566回 2020年2月23日 収蔵庫を窓からのぞいてみよう

講師 園田直子

受講者 30名

内容 展示、貸出、閲覧・調査など、さまざまな場面で活用されるみんなくの資料。資料を保管している収蔵庫はどのような場所か。みんなくで進めている収蔵庫の改修・再配架計画の話の後、収蔵庫を窓から実際に見た。

第567回 2020年3月1日 朝枝利男のガラバゴス探検

(新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時閉館のため中止)

講師 丹羽典生

第568回 2020年3月8日 2020年春のアメリカ展示場改修

(新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時閉館のため中止)

講師 伊藤敦規

第569回 2020年3月22日 風がもたらす異文化接触

(新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時閉館のため中止)

講師 久保正敏

第570回 2020年3月29日 旅と映画とマヤ民族

(新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時閉館のため中止)

講師 鈴木 紀

研究公演

特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連

「能と怪異（あやかし）」

2019年9月29日

司会 山中由里子

出演 辰巳満次郎（能楽師）

吉田憲司

参加者 638名

内容 特別展「驚異と怪異」の関連企画として、前半は能楽師、辰巳満次郎氏と吉田憲司館長が、異界と現界のはざまに立ち現れる精霊や妖怪を具現する面と演者について対談し、後半は能「土蜘蛛（つちぐも）」の公演をおこなった。

企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」関連

「ソン・ハローチョ——国境を超えるメキシコの歌」

2019年10月27日

司会 鈴木 紀

解説 ルベン・エルナンデス・レオン（カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授）

出演 カンバラチェ

参加者 384名

内容 企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」の関連企画として、ロサンゼルスを拠点に活動するソン・ハローチョのグループ「カンバラチェ」を招き、メキシコ人のアメリカ合衆国への移住の動向と、チカーノたちの暮らしにもふれながら、新旧のソン・ハローチョを紹介した。

みんなく映画会

【みんなく映画会】

2020年2月11日

「廻り神楽」

司会 林 勲男

登壇者 遠藤 協（共同監督／プロデューサー）

神田より子（敬和学園大学 名誉教授）

参加者 256名

内容 民博がこれまで継続してきた「被災地における無形の文化遺産の支援活動」の一環として、遠藤協・大澤未来共同監督作品「廻り神楽」の上映会を企画した。

両監督は2012年から岩手県宮古市の「震災の記憶伝承事業」に参加し被災地に通いはじめ、本作品を制作した。なお、上映会では遠藤氏と神田氏を招きトークセッションを合わせて開催した。

【みんなくワールドシネマ 映像から考える＜人類の未来＞】

＜人類の未来＞をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。（全3回）

2019年6月16日

「サーミの血」

司会 鈴木 紀

解説 庄司博司

参加者 305名

内容 スウェーデン・ノルウェー・デンマーク合作「サーミの血」を上映し、独自の言語と文化を持つサーミ

人の少女が、国の分離政策によって差別的な扱いを受け、自らのルーツと葛藤しながら成長し生きる姿をととして、民族のアイデンティティについて考えた。

2019年11月9日

特別展 「驚異と怪異——想像界の生きものたち」 関連

「ワンダーストラック」

司会・解説 山中由里子

参加者 255名

内容 アメリカ映画「ワンダーストラック」を上映し、美しい映像世界の中で、聴覚障害者の視点をととして、博物館の始まりについて考えた。

2019年12月22日

「あまねき旋律」

司 会 寺田吉孝

解 説 岡田恵美（琉球大学 准教授）

参加者 288名

内容 インド北東部、ミャンマー国境付近に位置するナガランド州の農村の歌を描いたドキュメンタリー「あまねき旋律」を上映し、日々の生活や感情を歌に紡ぎながら生きていく人びとを追う映像をととして、人間にとって歌とは何かを考えた。

【みんなく映像民族誌シアター】

本館オリジナルの映像作品である「みんなく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者による解説をおこなった。（全4回）

2020年1月11日

バイラヴ仮面舞踊

司 会 福岡正太

解 説 南 真木人

参加者 43名

2020年1月25日

ネパールの楽師ガンダルバ

司 会 福岡正太

解 説 南 真木人

参加者 50名

2020年2月8日

フィリピン周縁地域の音楽

司 会 福岡正太

解 説 米野みちよ（東京大学 准教授）

寺田吉孝

参加者 39名

2020年2月22日

民俗芸能と軽業

司 会 福岡正太

解 説 笹原亮二

参加者 34名

博物館社会連携

●学習キット「みんぱっく」

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸し出しを実施している。みんぱっくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2020年3月現在で17種類28パックを用意している。

名称	個数	2019年度貸出件数	2019年度利用者数
極北を生きる	2	11	2,043
アンデスの玉手箱	2	19	1,838
ジャワ島の装い	1	7	473
イスラム教とアラブ世界の暮らし	1	8	610
ソウルスタイル	2	16	1,224
ソウルのこども時間	2	16	1,248
インドのサリーとクルター	2	17	1,621
ブリコラージュ	3	0	0
アラビアンナイトの世界	2	10	1,584
アイヌ文化にであう	1	11	1,103
アイヌ文化にであう2	1	15	1,484
モンゴル	2	25	2,041
あるく、ウメサオタダオ展	1	7	775
世界のムスリムの暮らし1	2	22	3,907
世界のムスリムの暮らし2	2	18	1,987
エチオピアのコーヒーセレモニー	1	2	175
エチオピアをまとう	1	5	213

●ワークショップ

春のみんぱくワークショップ「かざってポン！オセアニアのかざり」

開催日：2019年4月6日(土)

講師：丹羽典生

参加人数：21名

オセアニア展示場の標本資料を活用したワークショップ。教員の解説の後、イノシシの牙のかたちをデザインしたスタンプの配置を考えながら布製バッグに押し、オリジナルのエコバッグを作成した

特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連ワークショップ「手づくりおもちゃ 張り子の絵付け」

開催日：2019年4月13日(土)

4月14日(日)

講師：豊永盛人（琉球張り子作家／玩具ロードワークス代表）

笹原亮二

参加人数：4月13日(土) 午前の部 17名

午後の部 19名

4月14日(日) 午前の部 19名

午後の部 19名

沖縄の張り子・玩具作家の豊永盛人氏を招き、張り子おもちゃの歴史や作り方、沖縄の人びとと張り子おもちゃとの関わりなどについての説明の後、同氏の指導で参加者が無地の張り子の半製品に自ら絵付けを行い、張り子人形を完成させた。

ワークショップ「みて ふれて つくって 世界のビーズ」

開催日：2019年4月26日(金)

4月27日(土)

参加人数：4月26日(金) 114名

4月27日(土) 178名

万博記念公園の「ロハスフェスタ万博 2019 SPRING」開催に合わせて、世界のビーズ資料に触れるコーナーと、ペーパービーズを使用したアクセサリー作りのコーナーを実施した。ペーパービーズ制作体験後に本館展示場内のビーズ資料の展示に関するリーフレットを配布し、本館展示場への入場をうながした。

夏休み子どもワークショップ「フィールドワークに挑戦！——極寒！-40℃のくらし」

開催日：2019年7月28日(日)

講師：大石侑香

参加人数：12名

小学4～6年生対象の民族資料観察ワークショップ。参加者は本館の中央・北アジア展示場においてシベリアの人々のくらしに関する資料を各自選択して観察し、講師の指導のもと研究報告書を作成した。研究報告書は一定期間、館内で展示され、来館者により閲覧された。

ワークショップ「ドムドム！タイの香り体験」

開催日：2019年8月3日(土)

講師：大澤由実

参加人数：午前の部 18名

午後の部 18名

ヤードム（ハーブや精油を混ぜたもの。嗅ぐことで気分転換などができる）を愛用するタイの文化や、使用する原材料（植物）などに関する説明を行った後、参加者が好みの材料を各自で調合し、オリジナルのヤードムを制作した。

ワークショップ「だれのぼうし？どんなぼうし？」

開催日：2019年8月12日(月・祝)

講師：大石侑香

参加人数：午前の部 14名

午後の部 14名

講師による帽子や機能や象徴性についての講義と本館の展示資料を参考に、各参加者は紙や布等を使用して思いの帽子を工作した。最後に、完成した帽子を身につけて発表会を行った。

企画展関連 親子deワークショップ「メキシコのパンづくり——死者のパン」

開催日：2019年10月20日(日)

11月24日(日)

講師：エルサ・マルティネス（メキシコ料理研究家）

小林貴徳（関西外国語大学 助教）

鈴木 紀

参加人数：2019年10月20日(日) 8組16名

11月24日(日) 10組20名

企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」関連ワークショップとして実施した。メキシコで行われる「死者の日」の供物である「死者のパン」を親子でつくり、日本とメキシコの死生観の違いや、死者に対する共通の思いを感じる機会となった。

KAKENHI ひらめき☆ときめきサイエンスワークショップ

「ゴミから生まれる異音獣！ 不思議なケモノはどんな音？ 不思議な音は何に見える？」

開催日：2019年11月2日(土)

11月3日(日)

講師：渡辺 亮（パーカッショニスト）

山中由里子

参加人数：11月2日(土) 21名

11月3日(日) 11名

特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の関連ワークショップとして、2日間に分けて2種類のワークショップを行った。1日目「不思議なケモノはどんな音？」では、世界各地の幻獣、怪獣を描いた展示物を鑑賞し、そのイメージを音にした。パーカッショニスト渡辺亮氏の指導のもとに廃材から楽器を作り、みんなで演奏した。2日目「不思議な音は何に見える？」では、渡辺亮氏の演奏を聞き、その不思議な音から想像をふくらませて、クリーチャーやモンスター、精霊の衣装をつくり変身した。参加者は思い思いの異音獣に変身、全員で大行進した。

年末ワークショップ「みんぱく村に神楽がやってくる！——伊勢大神楽実演とおはなし」

開催日：2019年12月14日(土)

講師：神野知恵

参加人数：343名

特別展示館を村の広場に見たて、参加者はみんぱく村の村人となって伊勢大神楽の到来を迎えた。獅子舞や曲芸の演舞の他に、神楽師たちの旅暮らしについての話を聞き、「伊勢音頭」を一緒に歌うなどして交流を図った。

ワークショップ「飛び出す獅子舞 福ぬりえ——つくって かざって 厄ばらい！」

開催日：2020年1月11日(土)

1月12日(日)

参加人数：1月11日(土) 92名

1月12日(日) 115名

伊勢大神楽が家々を訪れる様子を描いたぬりえを配布し、自由に着色した。会場内には伊勢大神楽の活動の様子を伝える写真パネルや、家々に授けられる神符などの展示、2019年12月14日実施ワークショップ「みんぱく村に神楽がやってくる！——伊勢大神楽実演とおはなし」の記録写真のスライドショーの上映を行った。

ワークショップ「ハンティの文様の世界——フェルトのコースターづくり」

開催日：2020年1月19日(日)

講師：大石侑香

参加人数：午前の部 14名

午後の部 14名

西シベリア森林地帯に暮らすハンティは衣服や日用品に動物等を象った文様を毛皮やビーズ、フェルトで施して装飾する。講師によるハンティの暮らしと文様についての講義の後、フェルトと毛糸を用いてハンティの文様を施したコースターを制作した。

●ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるガイドマップ「みんぱく見どころアラカルト」など、テーマに沿って本館展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどを作成している。これらは当館のホームページ上に掲載しており、ダウンロードして利用できる。2019年度は、「社会連携事業検討ワーキング」において作成した基本方針とコンセプトをもとに、来館者が各自の興味関心にあわせて選択できる10種類のアクティビティを集約したワークシート群のうち6種類の試作を行った。2020年度はこれらの試行と調査を行う。

●アウトリーチへの取り組み

国立淡路青少年交流の家にて開催された「ミュージアムキッズ！ 全国フェア in AWAJI 2019」においてワークショップ「つくって かぶって みんぱく・ほうし工房」を実施し、2日間で300人をこえる参加者があった。また、近隣施設である「ららぽーと EXPOCITY」内にある「EXPOCITY Lab」において「ドムドム！タイの香り体験とヤードづくり」をおこない、これまで来館経験のない一般市民に対し、より広く本館の研究成果および社会連携事業の内容を周知することができた。

●社会連携事業検討ワーキング

本館の博物館社会連携活動を強化するため、博物館活動に関する専門的知識を有する特任専門職員を配置し、2018年度新たに配置された人文知コミュニケーション及び社会連携担当の機関研究員をメンバーに加えた「社会連携事

業検討ワーキング」を立ち上げ、活動を強化するための体制を整備した。今年度は小中学生向けパンフレットの改訂を行うとともに、アウトリーチプログラム及びワークシートの充実に向けた検討を開始したほか、大阪大学との連携協定に基づき、日本と世界の民族文化の多様性と共通性を学び、文化の展示と表象をめぐる諸問題について考える機会を提供することを目的として、大阪大学の全学生を対象としたスタディ・ツアーのプログラムを実施した。

●みんぱく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春のガイダンス 2019年4月4日(木)、5日(金)

秋のガイダンス 2019年8月22日(木)、23日(金)

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には46団体149名、秋には34団体94名、計80団体243名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2019年10月16日(水)～11月14日(木)

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2019年度は6校15名を受け入れた。

その他の事業

●「音楽の祭日2019 in みんぱく」

実施日：2019年6月23日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は28のグループや個人の演奏があった。

●カムイノミ

実施日：2019年11月28日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。以前は萱野 茂氏(故人)を祭司に非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会(現 公益社団法人北海道アイヌ協会)の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施し、2019年度は豊浦アイヌ協会の協力を受け実施した。

●連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル 想像界の奥へ」

2014年度に一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を開講した。2020年度は、第1回目の講座を公開座談会としてグランフロント大阪のナレッジシアターにおいて実施し、第2回目はグランフロント大阪のカフェ・ラボにて対談を行い、第3回目は本館の展示場ツアーとし、これまでとは異なる形態で開催した。

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年9月に発足した団体であり、本館は、市民活動の場として、MMPの活動を支援している。

2019年度は、総勢170名を超えるMMPメンバーの自己研鑽のための支援として、特別展及び企画展の概要説明会(3回)、本館の教員による継続研修「来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座」(5回)を行った。さらに、新規メンバーに対しては、活動にあたり必要な知識を得るための研修(全5回)を実施し、そのうち1回は外部講師を招いている。以上の支援により、本年度MMPは展示場内における視覚障害者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者案内」を16回(案内数87名)、主に小学生を対象とした体験型見学プログラム「わくわく体験 in みんぱく」を16回(プログラム参加者数1,292名)、その他一般来館者を対象とした各種ワークショップ

プ（「点字体験ワークショップ」10回、特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連ワークショップ11回、その他のワークショップ8回）を実施した。また、特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連体験プログラム「いっしょにあそぼ！」および「20年後の子どもたちへ／未来への伝言板」の体験コーナーにおいては、12,000名を超える観覧者のサポートをした。さらに、館外で開催されたボランティアフェスタへも参加するなど、本館の外での活動（ワークショップ5回）にも積極的に取り組んでおり、博物館を起点とした社会連携を推進している。